奈良・西隆寺跡（さいりゅうじ）

1　所在地　奈良市西大寺東町

2　調査期間　第三〇六次調査　一九九九年（平11）七月～九月

3　発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部・奈良市教育委員会

4　調査担当者　奈文研代表　田辺征夫・奈良市　宮崎正裕

5　遺跡の種類　都城跡・寺院跡

6　遺跡の年代　奈良時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

本調査は、奈良市都市計画道路建設に伴うものである。南北に三つの調査区を設定し、調査面積は計六五〇㎡となった。

（奈　良）

調査地は、平城京右京一条二坊十五坪周辺であり、神護景雲元年（七六七）頃に造立が開始された西隆寺の、金堂から中門にかけての場所にあたっている。過去の西隆寺跡の調査では、東門地区・金堂地区から計八〇点の木簡も出土している（奈良国立文化財研究所『西隆寺発掘調査報告書』一九七六年）。

調査の結果、平城京造営以前の斜行溝、西二坊坊間西小路及びその両側溝、それを埋め立てて造営された西隆寺金堂基壇正面の瓦敷・同灯籠据付穴などが検出された。

木簡は、中央の調査区西端で検出された井戸SE七四〇から、削屑一点が出土した。井戸SE七四〇は方形縦板組で、井戸枠寸法は東西約一・二m南北約一・四m深さ約二mである。底部には拳大の礫を敷き詰めてあった。枠内埋土は灰色～暗灰色の粘砂で、木簡は、その埋土中より出土した。また埋土の最上層からは、海獣葡萄鏡が出土している。平城京期だが、西隆寺造営以前の井戸である。

8　木簡の釈文・内容

(1)　□　　091

墨付きが認められる削屑であるが、釈読できない。出土点数も一点のみであり、内容・性格なども不明とせざるを得ない。

9　関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報二〇〇〇―Ⅲ』（二〇〇〇年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』三五（二〇〇〇年）

（吉川　聡）